「国連」という錯覚

――日本人の知らない国際力学――

内海善雄 著　日本経済新聞出版社発行　定価：二〇〇〇円＋税

「国連」という錯覚――タイトルだけ見れば「国連中心主義に対する批判の本では？」という誤解を招くかも知れない。そうではない。国連の専門機関の一つである国際電気通信連合（ＩＴＵ＝本部ジュネーブ）の事務総局長を二期八年間務めた著者がＩＴＵの「復権」に向けて国際舞台で獅子奮迅の活躍をした記録であり、併せて国際機関運営の複雑さ、難しさをディテールまで描き込んだ本である。

旧郵政省で電気通信行政の「仕事師」として霞が関、永田町、業界でしられた著者は、郵務局長在任中、五十嵐事務次官の勧めもあり、一九九七年事務総局長選挙に立候補。「有権者」である世界の加盟国を相手にまさに地球規模の選挙運動を展開、他二人の候補者を大きく引き離して当選、一九九九年事務総局長に就任する（二〇〇六年まで）。選挙運動期間中に郷里香川県の父親が亡くなるが、選挙優先で、親の死に目にも会えず、葬儀にも出席できないという「厳しい戦い」だった。

著者は若い頃、ジュネーブの国際機関日本政府代表部に勤務し、さらに一九九四年京都ＩＴＵ全権委員会議議長を務めたキャリアを持つ。しかし、国際機関のトップの仕事は遥かに困難で、複雑なものだった。言葉の壁、国民性の違い、錯綜する各国の利害関係、国連政治の裏表、本音と建前、職員の既得権益、個人の思惑――もろもろの壁、高いハードル、認識のギャップ、そして誤解を乗り越え、在任中のハイライトとも言うべき「情報社会サミット」をジュネーブ（第一フェーズ＝情報社会のすべての問題点、二〇〇三年）とチュニジア（第二フェーズ＝開発途上国問題、二〇〇五年）で、成功裏に開催する。とりわけ、アメリカ主導のインターネット運用の領域に、公正性、民主的なインターネット・ガバナンスが必要という国際社会の合意を取り付ける事に成功する。今日の地球上の距離感を瞬時に無くす情報化社会は電話、ファクス、携帯電話、インターネット、放送、衛星放送、ＧＰＳなど電気通信インフラの整備・充実・技術革新抜きにはあり得ない。

ＩＴＵの主要任務はそのための電波割り当ての調整、電気通信技術の標準化、開発途上国のレベル引き上げなどである、一九八〇年代は「電話ネットワークの偏在（先進国中心）」が大問題（ＩＴＵのメイトランド報告）であった。しかし、今日その偏在性は相当是正され、途上国も電話ネットワークの恩恵により浴しているという新たな報告がある。これには著者の在任中の努力も多いに寄与しているのではあるまいか。

（山下靖典）